

日本はこうして降伏した 1945年2月～8月14日のやや詳しい経過は以下の通り。

- 2月4日～11日 ヤルタ会談 ヤルタ協定中の秘密条項 (No.188のV) ……日本は知るよしもなし！
- 2月14日 「近衛上奏」 ……「誠に遺憾ながら敗戦はもはや必至なりと存知候・・・」
- 5月7日 ドイツ降伏 ヨーロッパにおける第二次世界大戦終結。
- 6月～7月 ヨーロッパの中立国における在外高官による**和平工作**で日本の真意、連合国に伝わる。
- 7月16日 アメリカ、アラモゴードで原爆実験に成功。その一報はポツダム入りした大統領に伝わる。
- 7月24日 **原爆投下命令を発す** ……「天候が目視爆撃を許す限り、なるべくすみやかに・・・」
- 7月26日 **ポツダム宣言発表** ……合意時にはあった「**天皇制条項**」は削除されていた。
巡洋艦インディアナポリス、原爆本体を積んでテニアン島到着。(帰途30日に撃沈さる)
- 7月28日 日本政府、ポツダム宣言を「黙殺」と発言。 ……拒否とみなされる
- 8月3日 アメリカ、原子爆弾組み立て完了。投下作戦命令発せられる。
- 8月6日

アメリカ、広島にウラン原子爆弾を投下。

- 8月8日

ソ連、日本に宣戦布告

- 8月9日未明 **ソ連軍、「満州国」国境を破って侵攻** 日本の軍人の大半は事前に撤退していた。
①開拓農民が置き去りにされ**中国残留日本人孤児**の悲劇はこのとき発生した。
②ソ連は捕虜など65万人(200万人説もあり)を**シベリアに送り強制労働**させた。
- 8月9日9:00～ 戦争指導者たちの定例会議、はじめてポツダム宣言受諾を検討する
- 8月9日

アメリカ、長崎にプルトニウム原子爆弾を投下。

- 8月10日2:00～ 戦争指導者たちの定例会議、「御前会議」に切り替えられる。「御聖断」下る。
《天皇制を残すという条件をつけポツダム宣言を受諾する用意がある》と連合国に通告。
- 8月13日ごろ アメリカの一部の新聞社が「アメリカ政府の真意」をスクープ報道。《天皇制廃止の意思はない》
- 8月14日朝 再度の「御前会議」で「御聖断」を確認、午後早い時刻に**ポツダム宣言受諾を通告**
＝第二次世界大戦終結！
- 8月14日夕刻 録音技師が皇居内で天皇の声を録音(「玉音盤」は3枚制作された)。
- 8月14日夜 皇居ではクーデター未遂事件有り。 → 映画『日本の一番長い日』
アメリカ空軍機、埼玉県熊谷市を空襲。
「第二次世界大戦最後の空襲」(既に降伏しているのに!)は、秋田、小田原、高崎、伊勢崎、土先でも行われた。 ……この明確な国際法違反は裁かれていない。
- 8月15日正午 全国民が「玉音放送」(録音)で敗戦を知る。

- 1) 日本の戦争指導者たちは【1: 】の保障がなければ、決して降伏しない。1945年2月の【2: 】の天皇への上奏文は大略こう述べている。《欧米の世論は今のところ天皇制廃止まで行っていないから、今のうちに降伏すべし。敗戦より、敗戦時の混乱に乗じて【3: 】が起きる方がよっぽど怖い》と。国民に対しては「最後の一兵まで」と宣伝しておきながら、ホンネはこれであった。5月7日の【4: 】降伏以降、ヨーロッパの外交界が復活、中立国の日本大使館が機能し始めると、6月、7月には非公式に和平工作が始まった。その目的は、《【5: 】を廃止しないという保障があれば、日本はすぐにでも降伏する。》という認識を連合国首脳に広めることだった。
- 2) 7月26日にはポツダム宣言が発せられた。当時日本の戦争指導者たちの間では、既に「和平派」が多数を占めていたが、陸海軍大臣は現役武官であり、ことを急げば内閣が崩壊する危険もあった。8月6日、【6: 】は人類最初の原爆攻撃を受け、その日の内に原子爆弾であるとの認識を持ったが、3日も後の9日の定例会議で議題にする予定を立てたのみであった。原爆攻撃は、降伏決断の主要な原因ではないことが分かる。戦争指導者たちには、地方小都市の壊滅よりも、もっと重要な関心事があったのだ。8日の宣戦布告に次いで、9日未明より【7: 】が日ソ中立条約を破って「満州国」の国境を越えて大規模な侵攻作戦を発動した。サハリン、朝鮮にも侵攻した。これを受けて、9日の定例会議は、初めて【8: 】受諾について議論した。ソ連を含む連合国に分割占領された同盟国ドイツの現状を見れば、なすべきことは明らかだった。その議論が始まって2時間ほどしたところで【9: 】が原爆攻撃を受けた。戦争指導者たちは、無条件降伏を要求するポツダム宣言に対して条件をつけようとしていた。「1条件派」と「4条件派」は激しく対立した。後者は非現実的で、米軍上陸部隊と竹槍で交戦する覚悟が必要だった。議論は深夜に及び、日付変わって、10日午前2時、天皇が玉座に着き「御前会議」となった。天皇は両派の主張を辛抱強く聞いた。議長が慣例を破って「陛下、ご決断を」と発声。天皇は「外相案(1条件派)に賛成である」と述べた。これがいわゆる「【10: 】」である。政府はアメリカに対し、天皇制を維持することを条件としてポツダム宣言を受諾する旨伝え、回答を求めた。
- 3) もちろん、アメリカは回答しない。13日ごろアメリカの新聞の一部が「アメリカ政府は天皇制の廃止は考えていない」とスクープした。これを知った日本政府は、14日の朝、「御前会議」を開きポツダム宣言受諾を確認し、午後早い時刻にこれを伝えた。こうして、1945年8月14日、アジア・太平洋戦争は終結し、同時に【11: 】は終結した。事実上、無条件降伏ではなかったのだ。問題はこれを国民にどう伝えるかだった。結局天皇自身がラジオで全国民に伝えることになった。14日夕刻、技術者たちが録音機材を皇居に搬入して、終戦の「玉音盤」が録音された。天皇は修正だらけの原稿を1回で読み切った。この日の夜、「玉音盤」を奪い、天皇を載いて戦争を継続しようという将校たちがクーデタを実行、皇居の一部と放送局を占拠したが、機敏な対応で鎮圧することができ、「玉音盤」は放送局に輸送され、快晴の15日の朝は白々と明けて行った。正午からの放送で、国民は初めて天皇の肉声を聞き、戦争が終わったことを知った。

アメリカはなぜ原爆攻撃をおこなったか

- 1) 既に、1944年9月18日のローズヴェルト・チャーチル会談で、米英は《原爆が完成したら日本に投下する》ことを合意している。1945年、7月16日、人類最初の核実験に成功したアメリカは、投下準備の最終段階に入った。アメリカ軍はすでに、西日本の複数の都市に対して通常兵器による空爆を禁止して目標を確保していた。彼らは、少なくとも直径5kmの平坦な無傷の市街地を原爆の破壊力を遺憾なく発揮する場所として必要としていた。第一候補だった京都はトルーマンの反対で目標から除外された。トルーマンは軍の提供した誤った情報で、広島や長崎が軍事都市で一般市民はほとんど居住していないと信じていた可能性があることが21世紀の取材で明らかになった。だからと言ってアメリカ合衆国という国家の責任がいささかも軽減されるものではないことは言うまでもない。
- 2) 7月26日に発せられた【12: 】は、1点だけ合意されたものと異なっていた。それは、天皇制の存続を保障しない限り受諾しないだろうとの予測の下に、大意《戦後の日本政府が平和的政策を追求しようとする真正な決意を持つことについて、平和愛好諸国が確信を持ちうるならば……、現在の王朝の下に【13: 】を保持することも認める》という、いわゆる天皇制条項である。削除後、チャーチル、スターリン、蔣介石に再確認せず、アメリカの独断で発した。これでは、日本がポツダム宣言を受諾する可能性は皆無に等しくなる。兵器としての実戦用原爆は8月に入らないと完成しないので、アメリカ軍部主導の下、7月中に終戦になったら原爆を使用できなくなるから、間違っても受諾できない内容にしたのだ。戦後、一貫して天皇制を擁護・利用しているアメリカの基本政策と、天皇制条項の削除とは矛盾する。《早期終戦により多数の【14: 】を救う》ことが原爆投下の目的だとするなら、ポツダム宣言を合意された通りに発表し、天皇制存続を求める日本政府とハイテンポな交渉を行うことが最善だった。
- 3) 有名な「天候が目視爆撃を許すかぎりなるべく速やかに最初の特種爆弾を次の目標の一つに投下せよ。広島、小倉、新潟および長崎」という命令書は24日付で、発令は25日。この文書にトルーマン大統領が署名した記録は残っていない。ポツダム宣言を受諾しない日本を降伏させるために原爆攻撃を行ったとされるが、ポツダム宣言を発する前に投下命令が出されている。トルーマンは、ポツダムから帰国途上で大西洋を航行中であり、28日の日本政府によるポツダム宣言「黙殺」声明を確認してから投下を命じたとしているが、乗艦の発信記録にはそのような文書は残っていない。
- 4) 原爆本体が26日、重巡洋艦インディアナポリスに積載されてテニアン島に揚陸された。日本海軍の大型の潜水艦が残存し残り少ない酸素魚雷で決死の攻撃をかけてくる。米海軍はこれを恐れ、原爆本体を入れたコンテナは艦体に溶接されていた。こうしておけば、万一撃沈されても日本に回収される恐れはない。帰路、インディアナポリスは30日、伊58潜水艦からの魚雷攻撃で撃沈された。徹夜で組み立て作業が行われ、8月3日朝にはすべての準備が整い、作戦命令書が出された。低気圧が次々と日本列島を通過、「天候が目視爆撃を許すかぎりにおいて」という条件を満たさなかった。命令書は天気予報に基づき6日を作戦日としていた。予報通り、6日は素晴らしい晴天だった。原爆投下用に改造されたB29で、実際と同じ重量のウェイトを積んで訓練を重ねてきた「エノラ・ゲイ」号は広島に向けて発進した。相生橋の中央部には南側の巨大な中州（中島町）に連絡する橋が連結する世界的にも珍しい大きな橋上T字交差点がある。そこは直径5kmにわたる平野部市街地の中心であり、爆撃手はそこに照準を合わせて投下した。軍の施設もあるが、この地域は住宅・商業地域で人口密集地、中島町は繁華街である。途中でパラシュートが開いた原爆は北西の風に流され、現在の島病院上空580mで起爆した。巨大な火球から放たれた【15: 】でヒトの皮膚は破壊され、炭化した。爆心からやや離れると浅く広く破壊され桃の皮のように剥けて垂れ下がった。これが「ピカ」。衝撃派に次いで秒速100mの爆風が放射状に吹き、木造家屋を倒壊させ、無数のガラス片が突き刺さった人もいる。これが「ドン」。中心部から燃え広がった火災が、倒壊家屋の下敷きになって脱出できない生存者ごと焼き尽くしていく。発達した原子雲から大量の放射性物質を含む「【16: 】」が降り、遠く離れた地域にも被害が及んだ。その年のうちに約21万人が死亡した。投下後にトルーマンは軍事目標に対して投下したという大ウソに引き続き、投下の理由を3点述べている。①真珠湾奇襲攻撃への報復、②戦争責任者を懲らしめる、③最後通牒(ポツダム宣言)を拒否した。
- 5) 1945年2月の【17: 】中の秘密条項によれば、ソ連の参戦予定日は8月7日。ソ連が参戦すれば、日本は慌ただしく降伏するだろうとアメリカは予測していた。ソ連参戦の代償は【18: 】だが、7月中に早期終戦にすればそのリスクはない反面、原爆を使用できない。アメリカ軍部は、千島列島をソ連に与えてでも原爆を使用したかった。科学的データを得ると同時に、砂漠や無人島ではなく生きて活動する大都会に投下することで、どんなにむごい大量死をもたらそうとも、大統領が決断すれば、いつでも同様の攻撃ができることをソ連に示すことが真の目的だった。原爆は広島・長崎市民の頭上に投下されたが、政治的には【19: 】に投下されたのだ。ソ連は8月8日、日ソ中立条約を無視して日本に宣戦布告、9日未明から「満州国」国境を破って軍事侵攻を開始した。この日、11時02分、長崎市は2発目の原爆攻撃を受けた。攻撃機は【20: 】上空で雲ないしは煙のため投下を諦め、厚い雲に覆われた長崎市上空に飛来した。残燃料が帰還不能レベルに近づき、レーダー照準で投下(命令違反)しようとした矢先、浦上天主堂付近の一角の雲が切れ市街地が見えたので目視投下。長崎市街中心部から約3kmも離れた別荘のテニスコート上空、高度503m付近で起爆した(現在の爆心地公園)。巨大な火球の下端は地面に接していたという。広島原爆の1.5倍の威力があるが、周りが山で囲まれた特徴ある地形であったため、熱線や爆風が山によって遮断された結果、広島よりも被害は軽減されたが、それでも人口24万人のうち、7万4千人が死亡した。軍は3発目の準備を始めていたが、トルーマン大統領はこれを禁じた。8月6日広島、8日ソ連の参戦、9日長崎という順序を偶然だと思う人は少ないだろう。
- 6) 戦後、トルーマンは、《戦争を早期に終わらせ、多くのアメリカ兵の命を救うために原爆を投下した。正しい決断だった。》という立場を表明して世論操作を行い、アメリカ国民の多くが今もそう信じている。また、日本の戦争指導者たちが、ポツダム宣言の受諾を決断した第一の理由はソ連の侵攻であるが、世界は《2発の原爆が日本軍国主義を降参させた》というアメリカにとって好都合の誤解に陥った。なお、原子爆弾の犠牲者には日本人以外にも、徴用・招集で広島・長崎にいた朝鮮人やアジア各地からの留学生・アメリカ人の捕虜も含まれている。
- 7) アメリカの広島・長崎への原爆攻撃は、戦後の米ソ冷戦構造の原点というグローバルな意味を持っている。

補足 若い時期に一度広島・長崎を訪問し資料館をご覧になることをお勧めする。